北海道医報

ISSN 0913-0217　2026.4.1. 第1291号

発行人　北海道医師会長　松家　治道
編集人　情報広報部長　橋本　洋一

発行所　北海道医師会
〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目
TEL (011)231-1432　FAX(011)221-5070
URL http://www.hokkaido.med.or.jp/
E-mail info@office.hokkaido.med.or.jp　頒価 1部 275円(税込)

百年先の医療

情報広報部副部長　寺本（てらもと）　瑞絵（みずえ）

新年度が始まった。春は本来、希望や新たな出発の季節である。だが今年は、世界の不安定さを強く意識しながらの船出となった。国際情勢の緊張は続き、ホルムズ海峡の事実上の封鎖は、エネルギー価格の上昇やナフサ由来原料の不足に伴う医薬品・医療材料の供給不安をもたらし、医療にも影を落としている。

このような不透明な時代に、医療はどこへ向かうのか。百年前の医療を振り返れば、その隔たりは驚くほど大きい。抗菌薬の臨床使用は限定的で、画像診断や集中治療、精密な手術も存在しなかった。感染症や出産は、今よりはるかに死に近い出来事であり、医療者は限られた手段の中で患者と向き合っていた。

この百年、医学は診断・治療・予防のいずれにおいても飛躍的な進歩を遂げ、人類の寿命を延ばし、生活の質を大きく変えてきた。

そして、近年の医療の変化は医薬品や医療機器、医療技術の進歩にとどまらない。医療そのものの概念が変わりつつある。かつては医師が絶対的権威として治療方針を決め、患者がそれに従う構造が主であった。しかし現在は、Shared decision-making（ＳＤＭ）、すなわち共同意思決定へと確実に舵を切っている。医師は医学の専門家として、患者は自らの人生と価値観の専門家として共に向き合い、治療のみならず、どう生きたいかを共に考えることが、医療の中心に据えられつつある。同時に、医師像も変化している。医師はもはや全能ではなく、医学の限界と不確実性を引き受けたうえで誠実に向き合う姿勢、すなわちMedical Humility（医療における謙虚さ）が求められている。Advance Care Planning（ＡＣＰ）もまた、将来、意思表示が困難となる場合に備え、望む医療や生き方をあらかじめ共有する営みであり、疾患ではなく人生全体を見る視点に立脚している。

さらに、医療の持続可能性という観点も避けて通れない。医師の働き方改革やペイシェントハラスメントへの対応は、単なる制度論ではなく、誰がどのように医療を支えるのかという根源的な問いを含む。患者に寄り添うことと、医療者が一方的に負担を強いられ、疲弊することは同義ではない。支える側の尊厳と安全が守られてこそ、医療は持続し得る。

加えて、プレコンセプションケアに象徴されるように、医療は疾病への対応から、人生全体を視野に入れて未来を支えるものへと広がりつつある。プレコンセプションとは「妊娠前」を意味し、プレコンセプションケアは、妊娠希望の有無に関わらず、将来の健康やライフデザインを見据えて身体の状態や生活習慣を整える包括的な概念である。栄養、月経、喫煙・飲酒、ワクチン、こころの健康などを含む。健康とは、単に病気がないことではなく、学び、働き、生きるという人生の基盤そのものである。

これからの百年、ＡＩ、ゲノム医療、再生医療は確実に医療の姿を変えていくだろう。発症後の治療から、発症前の予測と予防へ。画一的治療から、個別化された医療へ。ＡＩは診断や治療選択、創薬に至るまで存在感を増し、その延長線上にはシンギュラリティ（技術的特異点）という発想もある。人の知的作業の多くが置き換えられる時代が来るのかもしれない。私たちは、その変化に目を閉ざすことなく向き合っていかなければならない。

しかし、技術が進歩するほど、鮮明になるものがある。それは、「この人にとって何が最善か」という問いは、知識や計算だけでは完結しないという事実である。人は合理性だけで生きているのではない。迷い、恐れ、希望し、ときに揺らぎながら生きている。たとえＡＩが知識で人を凌駕しても、苦しみを受け止め、言葉にならない逡巡に寄り添うことは、人間の役割であり続けるであろう。

百年後も、人は老い、死を免れない。世界から争いは消えず、気候変動や人口動態の変化も続くであろう。その中で残る医療とは何か。それはおそらく、患者と対話し寄り添い、その人がどう生きたいかという文脈を読み取る力である。高齢化と複数疾患が併存する社会では、臓器別医療だけでは支えきれず、地域や社会とのつながりを支える視点も不可欠となる。

百年前の医師もまた、目の前の人を救いたいという思いで患者に向き合っていた。その動機は今も変わらない。百年先に残したい医療もまた同様である。技術がいかに進歩しても、医療の本質は、人の苦しみに向き合い、その人生に伴走することにある。百年先の医療を考えることは、未来を予言することではない。いま私たちがどのような医療を守り、育てたいのかを問うことである。その積み重ねが、次の百年の医療を形づくっていくのだと思う。